

特集：「オーディオ・ホームシアター展 2015」より

Lyn Stanley 『音展』で日本初公演

～ Keio Light Music Society との共演で会場を魅了～

編集委員 森 芳久

10月16日～18日に東京お台場 TIME24 で開催された恒例の「音展」（オーディオ・ホームシアター展）2015 は 92 社が出展し、各ブースでの新製品試聴デモ、また多くのイベントも満員御礼の盛況だった。

その中でも特に人気を集めたのが、今最も注目されているアメリカのジャズ歌手 Lyn Stanley と Keio Light Music Society が共演した初日のライブコンサートであった。これは、日本オーディオ協会が世界に先駆け「ハイレゾ」規格を発表し、その一周年記念の特別イベントとして企画したもので、まさに「音展」のオープニングを飾るに相応しいイベントであった。

Lyn Stanley については既に本誌 7 月号でご紹介したが、数年前に偶然歌の才能に気づき、急速にその才能を開花させた音楽界では非常に珍しい経歴の持ち主である。ジャズ界の伝説のピアニスト、ポール・スミスに認められ歌手としてデビューし、2013年に初アルバム「Lost In Romance」を発表。2014年に第2弾「Potions [form the 50's]」、そして今年は第3弾「Interludes」をリリースしている。彼女自身もまたオーディオファンであり録音技術についての造詣が深く、音質については一切の妥協を許さず、自らを International Recording Artist と称しているほどである。もちろん自身の演奏に関しても同様である。

尚、「Interludes」はこの「音展」での初来日コンサートを記念し、世界に先駆け日本で発売という日本のファンには嬉しい贈り物となった。

これは 100 枚限定の SA-CD ハイブリッド盤で、特別に限定番号がプリントされたホログラフィック・シールが貼られ、ディスクには彼女の自筆サインが記されているものだ。この限定ディスクは当日コンサート会場で、またディスクユニオンのレコードコーナーでも発売され、用意した 100 枚は「音展」期間中に殆ど売り切れたという。



Lyn Stanley



Lyn Stanley 即売会とサイン会
（「音展」ディスクユニオンのコーナーにて）

Keio Light Music Society (正式名：慶應義塾大学ライトミュージックソサイエティ、通称：ライト) は、1946年に創立され日本では最も古い歴史を持つ学生バンドである。世界に誇るクラリネット奏者の北村英治、元カシオペアの神保彰、ルパン三世のテーマを作曲した大野雄二など、多くの著名な音楽家を排出していることでも知られている。また、今年8月に行われた第46回 YAMANO BIG BAND JAZZ CONTEST では最優秀賞を獲得し、まさに日本における名実ともに No.1 の学生バンドである。

さてコンサートであるが、Keio Light Music Society のメンバーによる演奏で第1部の幕を開けた。オープニング曲はミュージカル「マイフェアレディ」の「I Could Have Danced All Night」。若さ溢れるパワーとワクワクするような軽快な演奏に聴衆はすっかり引き込まれていった。ライブ演奏の生々しい音とその迫力は会場一杯に広がり、さらにその音は曲を重ねるごとに厚みを増し盛り上がりを見た。続く「Learning The Blues」ではしっかりと聴かせ、名曲「Take The A Train」を中にはさみ、フィナーレの「I'll Never Smile Again」まで全9曲を表情豊かに演奏してくれた。

このバンドの編成はサクソ5人、トロンボーン4人、トランペット5人、そしてドラム、ピアノ、ベースが各1名の総勢17名で、このフルバンドによる迫力のある演奏が音楽の楽しさはもちろん、今回の「音展」の楽しさを加速したことは間違いない。

そして第2部では Lyn Stanley が登場、「バードランドの子守唄」でその幕を開けた。彼女が歌い出すと、聴衆は豊かな声量とその心に響く歌声に魅了された。続いては1950年代の名曲「Teach Me Tonight」。サミー・カーンの洒落た歌詞のこの曲は多くの歌手が歌っているが、Lyn Stanley はこの歌詞をすっかり自分の中に取り込み、若いバンドとの共演で新しい世界を見せてくれた。この曲を聴いて彼女のファンが増えたことは間違いないだろう。3曲目はヴィンセント・ユーマンス作曲の「More Than You Know」。これは一途に愛する女心を歌ったもので、映画「ファニー・レディ」でバーブラ・ストレイサンドが歌い、また映画「恋のゆくえ／ファビュラス・ベイカー・ボーイズ」でもミシェル・ファイファーが歌ってストーリーを盛り上げるなど、愛を歌う歌手としては外せない曲である。Lyn Stanley はこの曲を表情たっぷりに、思いを込めて歌った。



コンサートの模様

最後の曲は「Fever」。ペギー・リーのヒット曲として知られているこの曲は、エルビス・プレスリーやサラ・ボーンもまた独自のスタイルで歌っている。Lyn Stanley は最初のアルバムにもこの曲を取り上げているように、彼女の最も得意とする持ち歌の一つとなっている。前日のリハーサルも聴いたが、正直そのときはまだバンドとの連携にぎこちなさが目立ったが、本番では彼女の歌にバンドが完璧にフォローし、時にアクセントを付け、その連帯感は見事であった。まさにここでは彼女がフィーバー、楽団がフィーバー、そして会場がフィーバーした。

こうして満場の拍手に包まれた「Lyn Stanley & Keio Light Music Society ジョイントコンサート」は大成功の中に幕を閉じた。

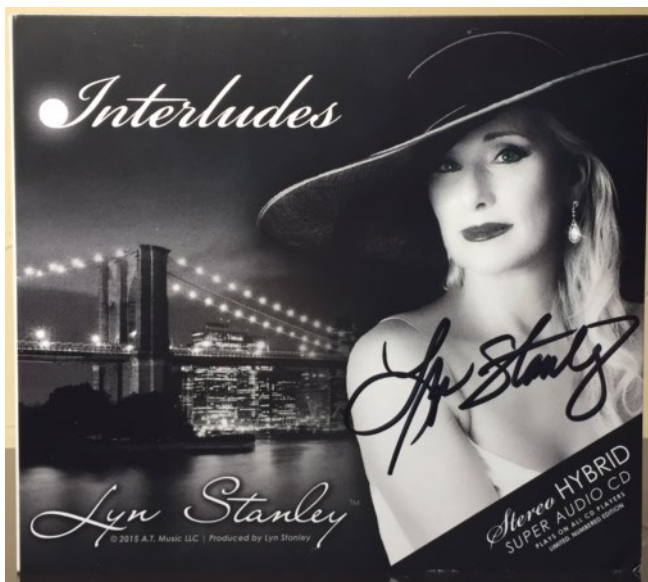
ここにこのコンサートの出演者全員の名前を挙げ、関係者の一人として改めて感謝を申し上げる次第である。

Jazz Singer / International Recording Artist: Lyn Stanley

慶應義塾大学ライトミュージックソサイエティ

tp : 安井一輝 (バンドマスター)、渡辺南友 (コンサートマスター)、今村舞、鈴木雄太郎、高木郁弥、tb : 竹内力、池本茂貴、吉田江美香、吉田圭佑、sax : 野村壘 (as)、西川武志(as)、竹内浩太郎(ts)、浅野隼人(ts)、鈴木涼馬 (bs)、pf : 鈴木茉帆、bass : 竹内悠人、dr : 渡健人、マネージャー : 阪口洋至

(以上敬称略、順不同)



リン・スタンリーさんの初来日コンサートを記念して日本で世界に先駆けて発売された「Interludes」のSA-CDハイブリッドディスク。リンさんの直筆サインと特別限定ナンバーが記されている。